

水稻中山間地における 斑点米カメムシの発生状況の把握と防除法の確立

要約

中山間地※において斑点米カメムシによる部分着色粒の発生を抑制するためには、無人ヘリによる一斉防除と粒剤散布を組み合わせた3回防除が有効であり、登熟期後半まで長期に斑点米カメムシの発生を抑制することが重要である。

※本試験ほ場の中山間地では、20回振りすくい取り調査をして、穂揃い期にクモヘリカメムシ成虫20頭、出穂15日後にクモヘリカメムシ幼虫13頭程度であった。

○ 展示のねらい

上都賀地域の米の主な等級低下要因は、斑点米カメムシによる部分着色粒が最も多く、その対策が求められている。そこで、斑点米カメムシの発生状況の把握と効果的な防除法（液剤等の広域防除+粒剤等の追加防除の時期と回数）について検討を行った。

	散布①	散布②	散布③
供試区A	トップジンスタークル(液) ^{※1} (穂揃期)	スタークル粒剤 ^{※2} (1回目散布後7日)	キラップ粒剤 ^{※2} (2回目散布後7日)
供試区B	トップジンスタークル(液) ^{※1} (穂揃期)	ブラシキラップ(液) ^{※1} (1回目散布後10日)	スタークル粒剤 ^{※2} (2回目散布後7日)
対照区 (農家慣行)	ブラシキラップ(液) ^{※3} (穂揃期)	ブラシキラップ(液) ^{※3} (1回目散布後10日)	

※1 無人ヘリによる散布 ※2 散粒機による散布、※3 動噴による散布

○ 主な成果

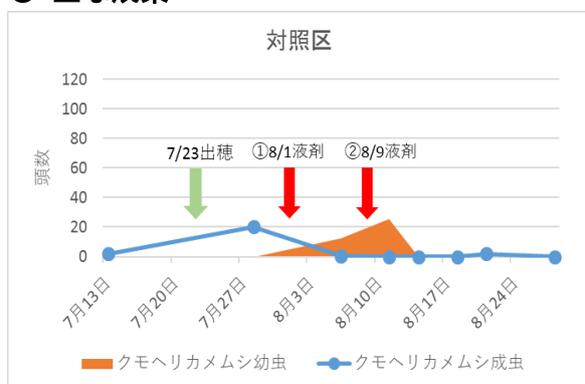


図1 カメムシの発生推移(すくいとり調査)

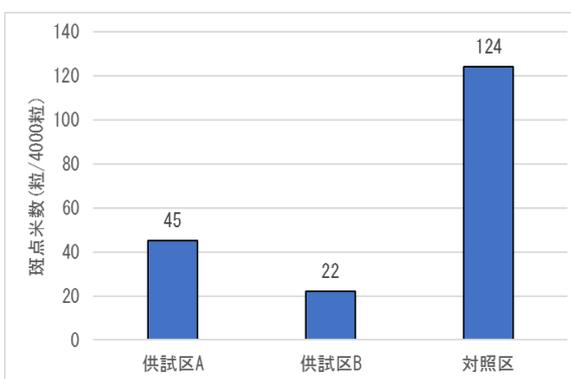


図2 斑点米数(目視調査)

液剤2回のみでの防除(対照区)では、登熟期後半まで斑点米カメムシの幼虫の発生がみられ、多くの斑点米が確認された。供試区A及び供試区Bのように、粒剤を組み合わせた防除を行うことにより、長期に効果が持続し、斑点米の発生を抑制することができた。

○ 今後の方向性

斑点米カメムシの多発地域である中山間地(激発地を除く)では、液剤の後に粒剤を散布する3回防除が有効である。今年度の試験結果を基に、技術情報等で防除体系の周知、定着を図る。

実施機関：上都賀農業振興事務所経営普及部

実施場所：鹿沼市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315